

で、だれも助けしてくれるような人は通りません。しかたなく、はうようにして歩き出しました。途中で何度も休みながら、ようやく小池こいけまでたどりつきましたが、もう一步も歩けません。人に頼んで馬にのせてもらい、やつこのことで家に帰りつきました。

伊策いさくの姿をみた祖父はびっくりして、

「ほら、伊策、すっかりしろ。十五夜さまにあげたいもをすつてきたぞ。」と、伊策の傷きずに薬をつけてくれました。酔すでどいたらしく、そのすっぱいにおいをかいでいるうちに、伊策はまた氣を失ってしまいました。ぼうつと気持ちちが遠のいていくうちに、伊策は夢を見ました。

そこは、自分がたおれていたがけの下のようでした。川の、ごうごうという水音にまじって、何やら、じゅもんのようなことばが聞こえます。よく見ると、岩のかべにはりついたように、まっ白な髪かみの老人がいます。